

『21世紀への対話』に臨んだトインビー博士の歩んだ道

北 政 巳

1. はじめに

A. J. トインビー博士は20世紀西欧世界を代表する国際政治・歴史家であり、また池田大作博士はアジアを代表する宗教哲学・教育者である。この二人が1972年5月と73年5月の4回にわたり対談、その後の書簡の交換を結実させ、オクスフォード大学出版部から発行した『21世紀への対話』（以下、対話と略す）は、今や世界の24カ国語に翻訳され、世界平和を渴仰する人々への啓蒙書として光彩を放っている。

日本を代表する歴史家であり英国経済史の碩学である角山榮博士（堺市博物館館長）は『対話』出版30周年を祝し「21世紀は文明の『衝突』か『共生』か」を発表し、ハンティントンの『文明の衝突』で展開した「西欧対非西欧」の構図を批判し、真の世界構築のためにトインビーの「多様な文明を受け入れ、多様な文明にもとづく国際秩序こそが、世界戦争を防ぐ最も確実な安全装置である」と再評価の必要を強調する⁽¹⁾。

対談されたトインビー博士と同名の叔父アーノルド・トインビー（1852-1883年）は、オクスフォード大学卒の秀才で30歳で急逝したが、英国で最初に「産業革命」（Industrial Revolution）の言葉を用いた著名な経済史家である⁽²⁾。角山博士の許で英国（特にスコットランド）経済史を学んだ私は、学生時代からトインビー博士に尊敬と不思議な親密感を感じていた。

事実、池田先生がトインビーと対談されたと聞いた1972年秋の大学祭の時に、大学一期生の学生有志数名と社会科学研究会を發起し、トインビー博士の文明論を学び大学祭で公表した思い出がある。それから30年を経て、昨年大学での新科目「21世紀文明論」を担当することになり、学生への講義準備に『対話』を再読した。偉大な西洋と東洋の「魂の対話」は、30年を経ても色あせず、むしろ行き詰まった現代世界に大きな指針を与えてくれていると実感できた。そこで本稿は先ずトインビー博士の思想遍歴から対談に向かう流れを吟味してみたい。

2. トインビー博士の著作と彼に関する著作

トインビー博士は1889年4月にロンドンで生まれ、7歳でラテン語、10歳でギリシア語を学び、英国最古のパブリック・スクールのウィンチェスター校からオクスフォード大学の名門ベリオル・カレッジに進んだ⁽³⁾。その昔グラスゴウ大学教授で『国富論』（1776年）著者でもある古典派経済学の父A. スミスも卒業後に留学した名門校である⁽⁴⁾。トインビーは1910年に卒業したが、古典学習に極めて優秀な成績を収めて奨学金の延長が認められ、翌11年に考古学研究生としてギリシアに遊学した。1913年に最初の結婚をし、14年に長男、15年に次男が生まれた。

1914年8月の第一次世界大戦勃発の時に、トゥキディデスの『戦史』を読み大きな影響を

受けた⁽⁵⁾。1918年から彼は英国外務省政治情報部に勤務、英国外交に関与するとともにロンドン大学で教鞭をとった。そしてドイツ人歴史家O. シュペングラーの『西洋の没落』(1918-22年)に啓発を受け、文明論研究に進むことを決意し、さらに優れたスコットランド人歴史家E. ギボンの『ローマ帝国衰亡史』(1776-88年)に示唆を得てローマ遺跡を探訪した。仕事面では、大戦終結後の1919年パリ講和条約会議で活躍した。1922年には3男が生まれた。

1925年に王立国際問題研究所(チャタム・ハウス)研究部長・ロンドン大学国際関係史教授となり、以降26年間、56年まで年鑑『国際問題大観』(*Survey of International Affairs*)を担当し、31巻を執筆編集した。1937年には47歳の若さで英国学士院会員に選出された。1941年には王立国際問題研究所の対外調査広報部長、1943年には外務省調査部長に任じられ、英国外交中枢に助言する立場をつとめた⁽⁶⁾。

しかし本質的に学問探究者であるトインビー博士は、二つの大戦の間、冬と春は研究所で『年鑑』を、夏と秋は『歴史の研究』を執筆、1947年以降はアメリカ・ロックフェラー財団の支援で、朝は自宅で午後は研究所で仕事を続けた。

1955年には王立国際問題研究所とロンドン大学を退職、1956年にはオクスフォード大学ベイリオル・カレッジの名誉フェローとなり、以降、自らに課した歴史研究の究明と公表活動に励むことになる。

トインビーの歴史研究がいかに精力的にされたかは、彼の著作で邦訳出版されたものだけを見ても、1957年に岩波書店からの『歴史の教訓』にはじまり、『戦争と文明』(社会思想研究会出版部、1959年)、『歴史家の宗教観』(社会思想研究会出版部、同年)、『世界と西欧』(社会思想研究会出版部、同年)、『ヘレニズム—ひとつの文明の歴史』(紀伊國屋書店、1961年)、『アジア高原の旅—民族と文明の興亡—』(毎日新聞社、1962年)、『失われた自由の園—現代アメリカ論』(毎日新聞社、同年)、『文明の実験—西洋のゆくえ—』(毎日新聞社、1963年)、『現代人の疑問—二つの世代の考え方—』(共著、毎日新聞社、1964年)、『トインビー著作集』(1)~(6)(社会思想社、1967年)、『世界の名著第61巻 トインビー』(中央公論社、同年)、*The World and the West*(研究社小英文叢書、1968年)、*The Present day experience in Western Civilization*(研究社小英文叢書、同年)、『現代が受けている挑戦』(新潮社、1969年)、『回想録』(1)、(2)(社会思想社、同年)、『交遊録』(社会思想社、同年)、『未来を生きる—トインビーとあなたの対話(続)』(毎日新聞社、1971年)、『歴史の研究』全25巻(経済往来社、1972年)、『死について』(筑摩書房、同年)、『歴史の研究』(1)~(3)(社会思想社、1974年)、『爆発する都市』(社会思想社、1975年)、『試練に立つ文明』(社会思想社、同年)、『日本の活路』(共著、国際PHP研究所、同年)と出版された。

トインビー博士は1975年10月にヨークで病没したが、その後も『図説歴史の研究』(1)~(3)巻(学習研究社、1976年)、『地球文明への視座—トインビー現代論集』(経済往来社、1983年)、『現代が受けている試練』(新潮社文庫、2001年)が出版された⁽⁷⁾。

トインビーの研究業績をめぐり、多くの学者が論争に参加した。厳しい評価を加えた人達もいる。そこで邦訳された研究書を挙げると、J. フォークト『世界史の課題—ランケからトインビーまで—』(勁草書房、1965年)にはじまり、山本新他『トインビー著作集』(別—トインビー研究)(社会思想社、1968年)、C. フランケル『近代人の擁護』(東海大学出版社、同年)、山本新『トインビーの文明論と争点』(勁草書房、1969年)、湯川秀樹編『平和の思想』(雄渾社、1973年)、平田家就『トインビー研究』(経済往来社、同年)、山本新『トインビーの宗教観』(レグルス文庫、1975年)、同『トインビーのアジア観』(レグルス文庫、同年)、篠田一士『現代の

小説論』(筑摩書房、同年)と続き、さらに彼の死後も、山本新『わかりやすいトインビー』(経済往来社、1976年)、同『トインビーの歴史観』(レグルス文庫、同年)、務台理作他『世界の大神』(34)(河出書房新社、同年)、山本新『トインビーの中国観』(社会思想社、1978年)、『人類の知的財産』(74)(講談社、同年)、『世界の名著』(61)(中央公論社、1982年)、湯田豊『トインビーと宗教』(北樹出版、1984年)、A.ブリックス他『トインビー・ホルの100年』(全国社会福祉協議会、1987年)、吉沢五郎他『人類と文明のゆくえトインビー生誕100年記念論文集一』(日本評論社、1989年)、『文明の転換と東アジアトインビー生誕100年アジア国際フォーラム』(藤原書店、1992年)、伊東俊太郎編『比較文明を学ぶ人のために』(世界思想社、1997年)、レイブラッドベリ『二人がここにいる不思議』(新潮文庫、2001年)、川窪啓資『トインビーから比較文明へ』(近代文芸社、2003年)、『現代とトインビー』(トインビー市民の会会報、同年)と続いてきた⁽⁸⁾。それは20世紀の生んだ最大の歴史学者・文明論者であるトインビー博士への畏敬と、その後の世界の複雑な展開を論理的に理解する方途を、トインビー研究から出発しようと読まれ続けているのではないだろうか。

3. トインビーの宗教観

数多くの日本人学者もトインビーの思想・哲学理解に不可欠な要件として、トインビーの宗教観に関心を示してきた。彼は典型的な英国ヴィクトリア期の中産階級に生まれ、父方は12世紀以来の「ディーンロー」(Danelaw)と呼ばれる英国北方のキリスト教にあり、大祖父ハリーは福恩派(反カトリック)の東インド会社の船長、叔父アーノルドは先述の経済学者、父ハリーは社会事業家であった。母方は14世紀以来「マーシア」(Mersha)と呼ばれるキリスト教であり、母サラはケンブリッジ大学卒の歴史教師であった⁽⁹⁾。川窪氏の研究によれば、トインビーは幼少年時代に処女懐胎や天地創造に疑問を感じ、オクスフォード大学時代にはキリスト教教義に疑念を持ち「不可知論者」になった。徹底した古典語教育を受けて卒業し、1913年にギルバート・マレーの娘ロザリントと結婚したが、ロザリントは聖母マリアへの敬心から1933年にカトリックに改宗した。

1946年にはロザリントと離婚し、同年ヴェロニカと再婚、その頃から「高等宗教の研究」に没頭していった。それは彼の『歴史の研究』の1～3巻(1934年)、4～6巻(1939年)が文明論中心であったのが、7～10巻(1954年)、11巻(1959年)、12巻(1961年)では、彼の「究極的精神的實在」(Ultimate Spiritual Reality)を容認する高等宗教を求めての遍歴となった⁽¹⁰⁾。トインビーはユング心理学に傾注し、そこから出発して世界宗教論を希求する立場をとった⁽¹¹⁾。

当初、トインビー自身の関心事は学術調査に基づく研究経験から文明論にあったが、次第に「文明の基盤となる高等宗教とは何か」に向けられる。また自らが立脚する宗教基盤を肯定し「世界教会は文明にとって癌ではない」と主張し「高等宗教の制度化が教会」とした。さらにキリスト教は「解体したシリア文明とギリシア文明の文化的複合」を背景に「父なる神イエスは民族的だが、全人類に開かれた宗教」として把握する一方、「処女降誕、復活、昇天、神の全能性、人格神は信じないが、愛は神であるを信じる」とした⁽¹²⁾。

他方、異教文化の根源となるインド文明のヒンズー教、シリア文明のユダヤ教、イラン文明のゾロアスター教、複合的文明のイスラム教に関心をもち、調査・分析を進めた。なかでもゾロアスター教は「歴史的高等宗教」として最も受入れ易く、善悪の闘いから分別する歴史観に賛同しながらも、いずれも民俗神の限界を越えず地方的性格が強く、異邦人に排他的な宗教であり普遍的な宗教にはなりえないとした。またユダヤ教の「ユダヤ人選民思想は知的・倫理的

にも大きな誤り」と述べ、「ユダヤ人をパレスチナへ帰すことが全歴史の方向とは思わない」とした⁽¹³⁾。

しかしながら興味あることに、仏教には特別な関心を向ける。彼は仏教が「法」を原理に全人類に開かれた宗教であることを高く評価する。しかし自らがキリスト教徒でもあり「仏法という輪廻（靈魂の再生）を信じない。またエゴイズムを捨てても愛や憐憫の情を捨てるのは同意しない。それ故に小乗には反対し、大乘のみを受け入れる」とした⁽¹⁴⁾。トインビーの『歴史の研究』によれば、29個の高等宗教が世界に存在することを見出し、そこから四つの結論、①真理と救済の道はひとつではない②魂への示顕に於ける神の光りの必然的な回析から「どの宗教も精神の永久的要求をすべて満足させることができるほど普遍的ではない」、③各高等宗教の信者はお互いに共通点を認め合えば、そこから「世界平和の建設ができる」、④トインビー自身は「特定の宗教のみを信ずるという立場をとらないし、またとれないとの知見を得た」を導いた⁽¹⁵⁾。

トインビーの精神史を知るため、80歳以降の彼の著作に目を向けると、自叙伝としての『回想録』(*Experiences*, 1969)、歴史研究としての彼自身による縮刷版『図説歴史の研究』(*A Study of History, Illustrated*, 1972)、『人類と母なる大地』(*Mankind and Mother Earth*, 1976)、また幼少の頃への回帰を示す『コンスタンチン・ポロフィロゲニトゥスとその世界』(*Constantine Porphyrogenitus and His World*, 1973)と、最後の書『ギリシア人とその遺産』(*The Greeks and Their Heritages*, 1981)、そして彼の宗教観をまとめた生前最後の論文「暗黒模索—ある歴史家の宗教への接近—」(*Groupings in the Dark, in An Historian's Approach to Religion*, Sept, 1973)がある⁽¹⁶⁾。

4. トインビーの文明史観

次にトインビーの文明史観の吟味を試みたい。ヨーロッパでは、歴史を全体観で把握し論理化する試みは、4世紀の聖アウグスティヌスの『神の国』(*De Civitate Dei*)やイブン・ハルドゥーン・ハドラミーの『序論』、『世界史』に始まった。

トインビーの前に近代文明論を展開した先駆者としてヴォルテール、ヘーゲル、マルクス、ウェルズ、シュペングラーがおり、同時代にはマイヤー、ソローキン、ガイル、P. バクビー、J. フォクトがいる。日本でもトインビーの影響下に山本新氏を中心とする文明論研究会が発起され、比較文明史学が究められている⁽¹⁷⁾。

トインビーの文明論の定義は「人類全体がすべてを包含する単一家族の成員として仲良く一緒に暮らしてゆける社会状態を創り出そうとする努力」であり、そこは生産に直接的に関与しない専門家が居住した都市を中心に結実されると観る⁽¹⁸⁾。

文明史研究家トインビーの構想する方向性には、川窪氏によれば四つの特色、①偏狭的(parochial)なものから世界的(ecumenical)なものへの方向、②文明中心史観から高等宗教優先史観への方向、③歴史における因果律の解明への方向、④歴史家の靈感と知識人の使命の方向にあるとする⁽¹⁹⁾。

先ず最初に教会教区(parish)を意味する言葉を比喩的に「狭い」とし、全キリスト教会を意味する言葉を「普遍的・世界的」と構想した。それを『図説歴史の研究』の序文に、「今、シングルファミリーすなわち単一の家族に人類がならなければ、非常に危険である」と書き記した。現実には世界平和を考えると、第二次世界大戦後の1945年に51カ国であった国家数はナショリズムの対立から分裂を繰り返し漸増してきた。と同時に他方では、国連のような世界権威

機構への国家権力の委譲方向を期待し「世界政府」、「未来国家」の方向性を願望する⁽²⁰⁾。

つまりトインビーは「世界国家」(universal states)を願望するが、そこにはナショナル・ヒストリー(民族史)は「理解可能な研究領域」ではなく、文明史こそが「自己充足的な研究対象」とする構想がある。そして過去の歴史国家と、そこに誕生した高等宗教さらに異文化交流による相互摂取のプロセスを挙げる。高等宗教がダイナミクスに新文明創造に優先するとの思考に至る。トインビー自身、『歴史の研究』の第6巻までは「高等宗教の歴史における役割は、親文明の子文明に摂取する『蛹』の役」と考えていたが、「文明社会の種の上に世界教会という高次元の種があるとすれば、文明の目的は高等宗教をうみだす手段となり、高等宗教が主役」となった⁽²¹⁾。

そして彼は『歴史の研究』の中で、現存する四つの高等宗教、ヒンズー教、キリスト教、イスラム教、仏教を比較研究し、各々の頑迷・狂信・偏狭の欠点を排除した「開かれた普遍的な宗教的立場」を宣揚する。さらに17世紀以来、世俗化してきた世界も、21世紀に向けて再び宗教的な意義に目覚めると確信し、意義を強調した⁽²²⁾。

次いで「歴史における因果律(causality)を史実を博引傍証しながら明瞭化」する。しかしトインビー自身は自然現象には因果律を認めても、歴史事象においては否定する。やはりキリスト教を基盤に思考する故に、人種や環境問題における決定論を否定しながらも自身の60年に及ぶ歴史事象研究の結果、「道徳的なカルマ(業)の存在を認め、それによって人類の運命は左右される」との結論に至る。そして『図説歴史の研究』の最後に、「驕慢が没落の先導をする」(pride goes before a fall)と書き入れた⁽²³⁾。「歴史家の靈感と知識人の使命」は、彼の『完訳歴史の研究』第20巻に、自身の真摯な学究の精進の姿を表明したものであった。さらにトインビーは長年の研究の中で「歴史研究から形而上史学(metahistory)」と進み「研究の過程で、私は『高等宗教』の歴史は、この既知の枠組みの中では理解可能にすることができず、したがってそれまでの作業計画を逆にするという実験を試みなければならないという結論に達した。私は高等宗教の観点から文明を説明することによって、文明の観点から高等宗教を説明することによって得たものよりも理解可能な歴史の図面を得ることができるかどうかを調べなければならなかった」の立場に至る⁽²⁴⁾。

そして「組み立てた歴史の中に現れる進歩は、変幻自在な現象である。それは原始生活の時代には進化として現れ、文明時代には『救済の歴史』(Heilsgeschichte)として現れ、文明時代に続く時代には終末論として現れる」に行きついた⁽²⁵⁾。

トインビー自身は、文明史研究を通じて「知性と靈魂の超合理的な諸能力との交響曲を目指すべき」としたが、多くの専門家間では彼自身の方法論の矛盾と思想体系における内部分裂を露呈したとされる⁽²⁶⁾。さらに文明の衰亡や興隆の背景には、彼が好んで使った言葉「挑戦と応戦(Challenge-and-Response)があり、ギリシア、イスラム、インド、中国等の文明が放射性を周辺地域に与え、応戦を受けたプロセスを人類史で論証しようとした⁽²⁷⁾。

5. トインビーと日本

トインビーは三度来日している。初めは1929年彼が40歳の時、京都で開かれた「太平洋問題調査会」に英国代表メンバーで来日した。そして同年7月から翌1月までヨーロッパ、小アジア、西アジア、日本、朝鮮、ソ連邦を訪問した。次いで第二次世界大戦後、1956年、彼が67歳の時に国際文化会館の招きで来日し、2月から翌年8月まで南米、ニュージーランド、オーストラリア、インドネシア、日本、東南アジア、インド、セイロン、パキスタン、中東を訪問し

た。

さらに1967年、彼が78歳の時、京都産業大学の招きで三度目の来日した。そして1969年には、日本政府から勲一等瑞宝章が贈られた。角山博士によると、トインビーの日本理解の転機は、第二次世界大戦で焦土となりアメリカ主導のキリスト教文化の絶対的影響を受けながらも、日本が固有文化の独自性を残続しながら見事な近代化をなし遂げたエネルギーに驚嘆した以降とする。トインビーは世界各地を廻った際、キリスト教文明が古代・中世・近代・現代と世界各地の地域文化を征服した、またしている歴史を凝視して侵略性に疑念を持ち、信ずるに足る「高等宗教」模索を自らの哲学探求に課すに至った。

興味深いのは当初、「日本は中国文明の養子文明（若しくは子文明）で日本的分かれ（分枝）」を考えていた⁽²⁸⁾。しかしフィリップ・バグビーの『文化と歴史』（1958年）の批判にも遭遇、さらに自らの実見聞を吸収し、『歴史の研究』第12巻『再考察』（1961年）や『凶説歴史の研究』第12巻（1972年）の頃には、日本の文明を中国の衛星文明と言いながらも「衛星文明はその文化の起源となった独立した文明よりも、必ずしも重要性と価値において劣るとは限らない」との結論にたどりつく⁽²⁹⁾。

そして戦後の日本のダイナミックな復興を、トインビー自身が「日本の『謎』に直面しての西洋の当惑は、一つの文化が、自らの文化侵略が当の犠牲者によって裏をかかれた時に感じる狼狽以外のなにものでもない。日本は西欧に魂を奪われたと見せかけることによって、実際には西欧の侵略者を武装解除させたかもしれない。日本における現在の文化的混合が発展を遂げて西欧および土着の二伝統の特異な合成を生み出すかどうかは、現在の段階ではまだ考えられない問いである。日本自身の世界への衝撃はまさに今はじまったばかりであり、近い将来において確実に大問題となるだろうから」と書き残した⁽³⁰⁾。

つまり明治維新以降の日本を世界史的な文脈の中で、西欧からの「挑戦」に対応した日本の「応戦」として把握して大きな関心を寄せ、特に第二次世界大戦後に不死鳥のように独自の再生・発展エネルギーと調和性に目をみはり、それを大乘仏教に求めようとした。

ヨーロッパ世界では、トインビーは彼の教会観を含めてなにかと問題視されたが、日本では温かく受容された。吉沢氏は「ライフ・ワークとなる世界史の包括的な研究を背景に、近代化の明暗と教訓に学び、東西文明の相合う日本の新しい歴史的役割を強調した」と総括する⁽³¹⁾。

6. トインビーのSGI池田会長へのアプローチ

トインビーの全体像を探究すると、三つの軌跡が見られる。第一には歴史家としてのトインビーであり狭隘なナショナリズム史観や西欧中心史観を相克して諸文明の等値の対比と貢献をあとづけながら、新しい世界史の構築を展望する。第二には国際政治学者として、英国国立国際問題研究所を中心に世界政治・経済変動を凝視しながら、一方で人類共和の相互依存のグローバル・システムの確立、他方での人間の尊厳と第三世界自立の確約を願望する。第三には一人の求道者として、謙虚にキリスト教の自己批判をしながら諸宗教の対話を通じて、新しい時代の「高等宗教」に至るプロセスを熱望する⁽³²⁾。このようなトインビーを「常に眼前の人ではなく未来の人に話しかけていた」と評する研究者もいる⁽³³⁾。

興味深いのは、トインビーと京都の関係である。事実、京都大学人文科学研究所はトインビーのいたチャタム・ハウスをモデルに設立された。さらに京都大学の原隨園、西谷啓治、深瀬基寛、貝塚茂樹、桑原武夫達との交友の中で盛んに大乘仏法を質問した⁽³⁴⁾。梅原猛博士は具体的に「トインビー博士が創価学会について強い関心を表明していた。トインビーの言葉を借

りと今のキリスト教にはとても、このようなエネルギーは残っていない。どうして仏教にはこのようなエネルギーが残っているのかと言われたが、当時の自分達には（創価学会と）接点がなかった」と書かれている⁽³⁵⁾。

つまりトインビーは滞日中、自らの研究の中で、大乘仏法のダイナミズムを発揮して個人と社会の共和を求めて発展する宗教に関心と興味を示した。帰国後自らが動けなくなっただけに、英国から渴仰の気持ちで、創価学会を代表される池田博士に招待状を出した。その会見の実現経過を、池田博士自身が『中央公論』で紹介されている⁽³⁶⁾。

記録によると、1972年5月5日、トインビー博士との対談がロンドンの博士宅で昼食をはさんで2度持たれ、9日におなじく2度にわたり持たれた。その後ホランド・パークを散歩された。池田博士夫妻は、この会談前後に、トインビー夫妻の母校オクスフォード大学とケンブリッジ大学を訪問され、創価大学の未来構想を練られたと聞いている。

翌1973年5月15日にトインビー宅で対談を再開され、19日まで4回の対談をされた。その途中の17日に、博士招待でロンドンのアセニウム・クラブで昼食をとりながら歓談された。そして「二一世紀は生命の世紀となる」ことで同意され、対談を出版し世に問うことを決められた。21日にはトインビー博士から池田博士の恒久平和提言への賛辞と感謝状が送られた⁽³⁷⁾。

1974年6月13日、創立者がパリ大学訪問から帰国、創価大学を訪問された。グラウンドにいた私達若手教員へ寄ってこられた。車座になって懇談された中で「トインビー博士から会ってくれと頼まれた人達なんだが皆さん、知っているかな」と紙切れを渡された。その場におり、紙切れを見たが達筆な英語での7名程の人名があり、判読できたのは辛うじてローマ・クラブの会長ペッチェイ氏くらいであった。いずれにしても池田先生は、トインビー博士から「世界平和への対話の継続・拡大」を要請され、フランスのアンドレ・マルロー博士、ルネ・ユイグ博士達との対話を開始された時であった。

1975年春、創価大学の在外研修で英国のグラスゴウ大学へ研究留学した私は、その年の5月パリとロンドンでお目にかかる機会を得た。特にロンドンでは、ペッチェイ会長との懇談後、トインビー博士のお見舞いでロンドンに見えサボイ・ホテルでお目にかかった。創立者御夫妻は、その朝研究所を訪問され博士秘書のオール女史に、完成した『21世紀への対話』特装版と「創価大学名誉教授証」を託され、パリへ戻られルネ・ユイグ、マルロー博士と会談を続けた。

そしてモスクワを通過の帰国途中、5月27日にモスクワ大学で「東西文化交流の新しい道」を講演され、同大学名誉博士号を受けられた。また同年12月、第2回目の中国訪問で、周恩来総理と会見される。世界平和への新たな展開となった。

7. 終わりに—対談からのメッセージ—

トインビーが熱望した会談が実現した時、トインビー博士は83歳、池田博士は44歳であった。トインビー博士は、自らの世界遍歴の末に辿り着いた未来を拓く大乘仏法のエネルギーを学びたく会見を申し込んだに違いない⁽³⁸⁾。

角山博士は、この歴史的対談を再度熟読して「世界の歴史と文化に通暁したトインビー博士を前に、池田氏は旺盛な知識欲を発揮され果敢にまた謙虚に学ぶ態度で臨まれる。大変な量と内容を準備されたに違いないが、会談のなかで池田氏の披露する大乘仏教の核ともいえる『法華経の思想と哲学』を聞きながら、トインビー博士の態度が『知識を披露する姿から知恵を学ぶ姿勢に変化した』と読める。それは『池田氏が博士にとって最も辛かった事は何ですか』と尋ね、同博士が『長男の自殺』と答えた後に決定的となる」とされる。角山博士の分析は、ト

インビー博士が「深遠な三世の生命の因果律」を聞き自らキリスト教徒の限界点におきながらも、対談の歴史的意義を踏まえて未来の世界平和への希求・創造を、池田博士に託す彼の信条が読み取れる」とされる⁽³⁹⁾。

ここでは『対談』の中味の評価と分析は敢えて避けたい。なぜなら、私には未だ試みるに必要な知識も哲学も充分でないと自認するからである。しかし、その問題意識をもって歴史研究を研鑽し、いつの日か挑戦してみたい。

そこで私自身が経験した四つのエピソード紹介をもって終わりたい。先ず私が創価大学の国際部長の時代、来学し交流協定を結んだスペインのバルセロナ大学の著名な政治学者でもあるブリカル総長が、1990年5月に池田博士と会談した際、「池田博士、貴方とトインビー博士の『対談』は大きな歴史を開きました。しかし対談された時は『冷戦』の最中で誰もが対話の時代が来るとは思わなかった。あのまま冷戦が続けば『対談』はさほど関心を集めなかったでしょう。何故、あえて出版されたのですか」と質問された。その答として「私には確信がありました。人類史の未来を考えると、対話による冷戦の消滅しかないと確信しました。トインビー博士も合意され、私に世界平和への対話活動の推進と拡大を勧めてくださいました。今日の出会いも、そのひとつと思っています」と答えられた。

次にいかに多くの心ある知識人に読まれているかについてである。1990年3月、プエノスアイレス大学の名誉学位授与式に大学理事の池田博正氏が代理受領される事になり随行した。その時、同大学のO. シュベロフ総長に英語版『トインビー対談』を謹呈した際、同総長は「実は妻が昨年クリスマスに、書店で私へのプレゼントとして最適書を捜していた時、スタッフの方から勧められたそうです。読んでみて心が洗われて勇気が出ました。そこで名誉学位を贈る話が出てきたのです」と言われ、『対話』の読まれている広さに感動した。

また創価大学が1992年9月に、シンガポール南洋学院と共に第3回環太平洋シンポジウムを開催した時、同国を代表する南洋理工大学のリム・チョンヤン博士が、その基調報告の中で多くの聴衆を前に「私はトインビー博士がシンガポールに来た時、自分の研究室に迎えたことがあります。その後、京都大学図書館でアジア人と彼との『対話』を見つけて感動しました。そして今回シンポジウムを開催するにあたり創価大学関係者から本をいただき、池田大作氏と知り喜んでいました。あの時『対談』の中で今後の中国とベトナムの未来について大変評価されていることに感銘を受けました。まさに世界の歴史は、その方向に進んでいます」と発言された。その1年あと、来日した際、リム・チョンヤン博士夫妻は池田先生と初めて会談された。

また1995年11月に、池田先生がマカオ政務長官ランジェラ博士一行と香港SGIセンターで会われた時、マカオ大学のポルトガル人で医学者のマカオ大学総長M. フェレーラ博士がいた。式典で池田先生に挨拶して後、サイン入りの英語版『対談』を受けとられた。その後に近くのホテルで喫茶・懇談した時、フェレーラ博士が興奮気味に「今の方が池田博士ですか。これはサインですよ。実は、昔パリのパスツール研究所にいた頃『対談』フランス語版を書店で見つけて読み、感動しました。そしてリスボンへ戻り、ブラジルで出版されたポルトガル語版を読みました。私は、てっきり対談者も同年齢と思っていました。それだけに今日、ご本人にお目にかかり、しかもオリジナルの英語版にご署名までしていただき感激しています」と言われたのを聞き、不思議な感動を覚えた。

さらに1996年5月に、来日したコスタリカ共和国のフィゲレス大統領と会見された。一行は大統領以下、彼の母さらに数人の関係もこられた。ちょうど池田博士がキューバの後コスタリカを訪問されることが決まっていた。池田博士が大統領の父君の偉大な功績から同国の平和政

策を讀えられた時、フィゲレス氏が「一言、発言したい」と立ち上がり、「私はちょうど、トインビー博士と会談された時の池田先生と同じ年齢です。先生がトインビー博士に会見されたような優秀な弟子にはなれませんが、精一杯見習っていきたいとお目にかかる前から考えてきました。キューバの帰りに我が国に立ち寄られる時、私は一介の青年探究者としてお目にかかりご指導を受けたいと願っております」と言われたのを見て深い感動を味わった。

角山博士は「少なくとも日本人の関与した本で、これほど多くの言葉に翻訳され読まれている本は他に例をみない。この事実を凝視すべきである」とされ、この本が「現代世界への平和への指南書」と評価される。つまり『21世紀への対話』は、既に24カ国語に翻訳され、世界の多くの人達に読まれる。それは『対話』をされた二人の偉大な西洋と東洋の魂の平和を求めている「邂逅」であり、人類史の平和構築へのメルク・マールとなり光り輝きを増していることを表すのではないだろうか。

つまりトインビー博士は、人類の未来のあるべき社会を求めて研究・旅行して、あるべき文明、さらに基盤となるあるべき「高等宗教」を求め続けた。そして最後に日本の大乘仏教、さらに就中、創価学会にゆきついた。また池田博士と対談して、創価学会の哲学とエネルギーに感嘆し、未来の人類の平和社会構築における、その役割を確信した。そこで池田博士に、さらなる「真なる大乘仏教の覚醒運動」を期待し、自らの友人との対話運動を要請した。他方、池田博士は先師である牧口・戸田両先生から継承した創価学会運動をどのような形で世界に宣揚していくかを模索されていた時、トインビー博士に会ったことになる。

トインビー博士は、その時すでに創価学会の運動が、池田博士の哲学的解釈に導かれ日蓮仏法の本義のエネルギーを発揮し、世界の平和文明の構築に貢献することを予見していたのではなかろうか。つまり創価学会が未だに日本また日本人に限定された宗教団体と考えられた時代に、トインビー博士は既に今日の池田博士の指導のもと世界187カ国に容認され世界の民衆に平和と幸福へのエネルギーを送る「高等宗教」を基調とする教育・文化団体と成長することをも展望していたことになる。

(注)

- (1) 角山榮「21世紀文明の『衝突』か『共生』か」(『週間読書人』2003年7月26日所収) 5面
- (2) 彼はロンドンのスラム街改良運動を進める社会改良家として知られる。村岡健次・川北稔編『イギリス近代史—宗教改革から現代まで—』(ミネルヴァ書房、1986年) 56頁。またホブハウスは、彼を「自由な自由主義の創始者」と評する。毛利健三『イギリス福祉国家の研究—社会保障発達の諸各期—』(東京大学出版会、1990年) 182頁
- (3) W・H・マクニール『アーノルド・J・トインビー、その生涯』が数多くの邦訳されたが、最近のものに浅田実「A・J・トインビーの人生から学ぶ」(その一)(『創価大学人文論集』第15号、2003年) 13-16頁がある。
- (4) 拙著『スコットランド・ルネッサンスと大英帝国の繁栄』(藤原書店、2003年) 114頁。
- (5) トウキュディアスは人類に「世界史」という概念を与えた。(W・ウッドラフ、原剛他訳『概説現代世界の歴史』(ミネルヴァ書房、2003年) 1頁。
- (6) 山本新『トインビー研究—トインビー著作集 別—』(社会思想社、1968年) 264-274、336-338頁。
- (7) これらの書籍は創価大学図書館蔵である。翻訳出版順に並べてみた。
- (8) 同様に大学所蔵である。翻訳出版順に並べてみた。
- (9) 川窪啓資『トインビーから比較文明へ』(近代文芸社、2000年) 26-28、35頁。

- (10) 湯田豊『トインビーと宗教』（北樹出版、1993年）29、97、108頁。
- (11) 『完訳 歴史の研究』第15巻（経済往来社、1972年）692頁。
- (12) 『回想録』第1巻（社会思想社、1970年）196頁、同第2巻 15頁。
- (13) 吉澤五郎『世界史の回廊—比較文明の視点—』（世界思想社、1999年）259—268頁。
- (14) 深瀬基寛『歴史家の宗教観』（社会思想社、1959年）に詳しい。また『完訳 歴史の研究』（経済往来社、前掲）第15巻 591—624頁。
- (15) 最晩年のトインビーの宗教観は、『暗中摸索』のプロセスは229—321頁に、結論は303、309頁の図に表される。
- (16) トインビー文明論が残した遺産は大きい。同時代の歴史家には厳しく批判されたが、彼の文明論は現在の社会科学に大きなモデルを与えた。秀村欣二監修『文明の転換と東アジア—トインビー生誕100年アジア国際フォーラム—』（藤原書店、1992年）に世界各国での研究動向が集められている。またA. G. フランクがトインビー文明論をふまえて東洋に関心をもち『リオリエント—アジア時代のグローバル・エコノミー』（藤原書店、2000年）22、48頁。
- (17) 神川正彦『比較文明の方法—新しい知のパラダイムを求めて—』（刀水書房、1995年）50—63頁参照。
- (18) 『図説 歴史の研究』第1巻 48頁。また、堤他訳『様式と文明』（A. クローバー著 創文社、1983年）が参考となる。
- (19) 川窪先掲書 82頁。
- (20) この世界国家へのトインビーの気持ちは、『二十一世紀への対話 [中]』（聖教ワイド文庫、2003年）第4章「一つの世界へ」169—204頁参照。
- (21) トインビーは「宗教復興」の気持ちを、毎日新聞（1953年元旦号）に「五十年後の世界」という論文として寄稿している。
- (22) 深瀬基寛訳『試練に立つ文明』（社会思想社、1975年）7頁。
- (23) 『図説 歴史の研究』第3巻 142頁。
- (24) 『歴史の研究』第23巻 1205頁。
- (25) 同上 1212頁。
- (26) 同上 1217頁。
- (27) 挑戦と応戦について、池田博士は、トインビーの言葉を思い出しながら「試練という『挑戦』に勇敢に『応戦』せよ」と、そこに新たな創造の源泉があると観る。（池田大作「読書の力」、『聖教新聞』3面、2002年10月19日）この考え方は多くの歴史家が使い、現代を代表する社会科学の枠組みとなっている。大橋洋一訳『文化と帝国主義』（E. サイード著、みすず書房）第1章「重なりあう領土、からまりあう歴史」、また山下範久『21世紀の脱—社会科学新しい学』（藤原書店、2001年）第8章「社会変動」等に用いられている。
- (28) 『歴史の研究』原著 第10巻まで理解とされる。川窪先掲著245頁。
- (29) 『歴史の研究』第23巻 1029頁。それは『再考察』（1961年）や『図説 歴史の研究』（1972年）頃からであり、やはり日本滞在での大乘仏教のエネルギーを見た結果であろう。
- (30) 『図説 歴史の研究』第3巻、45頁。
- (31) 先掲『文明の転換と東アジア』249頁。また角山博士は、視点をかえ日本が新しい時代のルネッサンスの中心であるとされる（角山榮『アジア・ルネッサンス—勃興する新・都市型文明—』、PHP研究所、1995年）98—114頁。
- (32) 1939年までの『歴史の研究』第6巻までは文明中心史観で書かれたが、第7巻以降は高度宗教優先史観から書かれ、特に同第7部「世界教会」に向けられている。
- (33) 湯田先掲書 15頁。
- (34) 角山先掲（『週間読書人』）5面。
- (35) 『世界に拓く関西創価学会』（聖教新聞関西支社、1982年）113頁。

- (36) トインビー博士からの最初の招待状は、1969年9月23日付である。帰国された直後に「トインビー博士との5日間」(『中央公論』1973年8月号 201-209頁)があるが、最近「トインビー博士との語り」(『聖教新聞』2002年5月4日3面)を回想的に書かれている。また英国SGI機関紙(*Art of Living*, May 2002)に会見30周年記念として特集が組まれている。
- (37) トインビーはベトナム戦争に対するアメリカ政策批判を展開、それに反論するライシャワー駐日大使の反論が、別冊『潮』昭和42年秋季号に収録される。
- (38) 池田博士のトインビー宅訪問の1週間前に麗澤大学の廣池千太郎博士一行の訪問を受けている。これはトインビー博士が英国から日本の思想・哲学を学びたく招聘状をだした結果と思われる。川窪先掲書155-157頁。
- (39) 角山先掲参照。